

リスクコミュニケーションに関わる人々

これまでの研究成果から

(ちょっと古いけど)

堀口逸子

消費者に必要な食の安全に関する知識－専門家対象質的調査－

厚生労働科学研究費補助金 食品の安心・安全確保推進研究事業

食品の安全についての普及啓発のためのツール及びプログラム開発に関する研究（平成20、21年調査）

順位	管理栄養士・栄養士 ¹⁾	食品衛生監視員 ²⁾	食品安全委員会専門委員 ³⁾
1	残留農薬(と抗生物質)	生食の危険性	リスクの考え方(リスクゼロ)
2	加工食品・調理済み食品・外食の原材料	食中毒防止	残留農薬
3	食中毒防止	ゼロリスク(リスクゼロ)	遺伝子組換え農作物・食品
4	残留農薬の除去方法	食品表示	化学物質の量と作用の関係
5	産地表示	健康食品	メディアの功罪
6	食物アレルギー(表示)	科学的根拠の重要性	食品添加物の種類、作用、使用
7	地産地消	安全と安心の違い	食中毒の対策と有効性
8	表示の見方	消費者の役割と責務	天然毒・自然毒
9	遺伝子組換え食品	期限表示	食中毒
10	農薬の健康影響	農薬の安全性	健康食品(サプリメント、機能性食品など) 自然は安全との間違った考え方

1) グループインタビュー 2) 3) デルファイ法

文献)

1) 竹田早耶香, 赤松利恵, 田中久子, 堀口逸子, 丸井英二, 消費者にとって必要な食の安全に関する知識, 管理栄養士を対象とした質的調査, 栄養学雑誌, 68, 31～35, 2010

2) 中垣俊郎, 堀口逸子, 赤松利恵, 田中久子, 馮巧蓮, 丸井英二, 消費者が必要な食の安全に関する知識－食品衛生監視員対象の質的調査から－, 厚生指標56, 48～52, 2009

3) 益山光一, 堀口逸子, 赤松利恵, 丸井英二, 消費者に求める食の安全に関する知識－日本における食品リスク評価者を対象とした質的調査－ 日本食品化学学雑誌, 19, 44～48, 2012

学校で実施している食の安全教育の内容				平成22年
大分類	中分類	学校栄養士	家庭科教諭	養護教諭
食中毒・感染症の予防	手洗い	○	○	○
	食品の扱い方	○	○	
	食器・調理器具の扱い方	○	○	
	給食当番の体調確認	○		○
	白衣・マスクの着用	○		
	感染症のメカニズム			○
	症状が出た時の対応方法			○
	食中毒を起こさない体づくり			○
事故・けが防止	熱いものの扱い方	○		
	道具(刃物・缶)の扱い方		○	
	調理室の環境		○	
食物アレルギー	除去食・代替食の実施	○		○
	アレルギー対応メニューの開発	○		
	アレルギー表示		○	○
	取り箸の用意		○	
	アレルギーの概要・アレルギー児への理解			○
食の選択能力	表示の見方	○	○	
	食材に触れる	○		
	視野を広げる		○	
	情報リテラシー		○	
安心できる食材の利用	無農薬・有機栽培	○		
	学校菜園	○		
	国産	○		
	地産地消	○		
食品添加物	添加物の役割		○	
	身を守るための食べ方		○	
	リスクの考え方		○	
	リスクコミュニケーション		○	
歯磨き指導	歯磨きの方法			○
	家庭での歯磨きの啓発			○
生活・食の指導	栄養バランスのとれた食事			○
	生活習慣を整える			○
	食に対する関心			○

小学校における食の安全教育を担う教職員の特徴(量的調査)

全国小学校名簿から抽出し1校に3つの質問紙を配布(校長あて)

	学校栄養士	家庭科教諭	養護教諭	計	
送付数	1095	1095	1095	3285	
送付数(届いた数)*	1075	1075	1075	3225	*閉校、統廃合等
返信数	192	297	355	844	
回収率(%)	17.9	27.6	33.0	26.2	送付数(届いた数)を基準
有効回答数	186*	297	355	838	*教諭が回答、無回答等
有効回答率(%)	17.3	27.6	33.0	26.0	送付数(届いた数)を基準

郵送配布・回収

文献)

堀川翔, 赤松利恵, 堀口逸子, 杉浦淳吉, 丸井英二: 小学校における食の安全教育を担う教職員の特徵—学校栄養士, 家庭科教諭, 養護教諭を対象とした調査— 栄養学雑誌, 69, 253~260, 2011,

堀川翔, 赤松利恵, 伊能由美子, 堀口逸子, 丸井英二, 職種からみた郵送質問紙調査の回収率, 栄養学雑誌, 69, 193~198, 2011

「100%安全な食品はある」と思うか

n(%)

	全体	学校栄養士	家庭科教諭	養護教諭
そう思わない	255(30.4)	80(43.0)	68(22.9)	107(30.1)
あまりそう思わない	348(41.5)	72(38.7)	126(42.4)	150(42.3)
少しそう思う	174(20.8)	24(12.9)	75(25.3)	75(21.1)
そう思う	50(6.0)	9(4.8)	23(7.7)	18(5.1)
欠損	11(1.3)	1(0.5)	5(1.7)	5(1.4)

児童が小学校で習得する必要があると思う内容 (10項目での順位づけ)

順位	全体	学校栄養士	家庭科教諭	養護教諭
1	食中毒防止	食中毒防止	食品表示の見方	食中毒防止
2	食品表示の見方	食物アレルギー	食中毒防止	食物アレルギー
3 ^(2*)	食物アレルギー	食品の鮮度の見分け方	食品の鮮度の見分け方	食品添加物
4	食品の鮮度の見分け方	食品表示の見方	食品添加物	食品表示の見方
5	食品添加物	輸入食品	輸入食品	食品の鮮度の見分け方
6	輸入食品	食品添加物	食物アレルギー	リスクの考え方
7	リスクの考え方	リスクの考え方	残留農薬	健康食品
8	健康食品	残留農薬	リスクの考え方	輸入食品
9	残留農薬	健康食品	遺伝子組換え食品	残留農薬
10	遺伝子組換え食品	遺伝子組換え食品	健康食品	遺伝子組換え食品

項目は平成20-21年の食品衛生監視員、食品安全委員会調査結果を参考に設定
「必要だと思わない(1点)」～「必要だと思う(4点)」から平均点を算出

子どもが学ぶべきと考える食の安全教育の内容 —小学生の子どもをもつ母親対象Web調査—

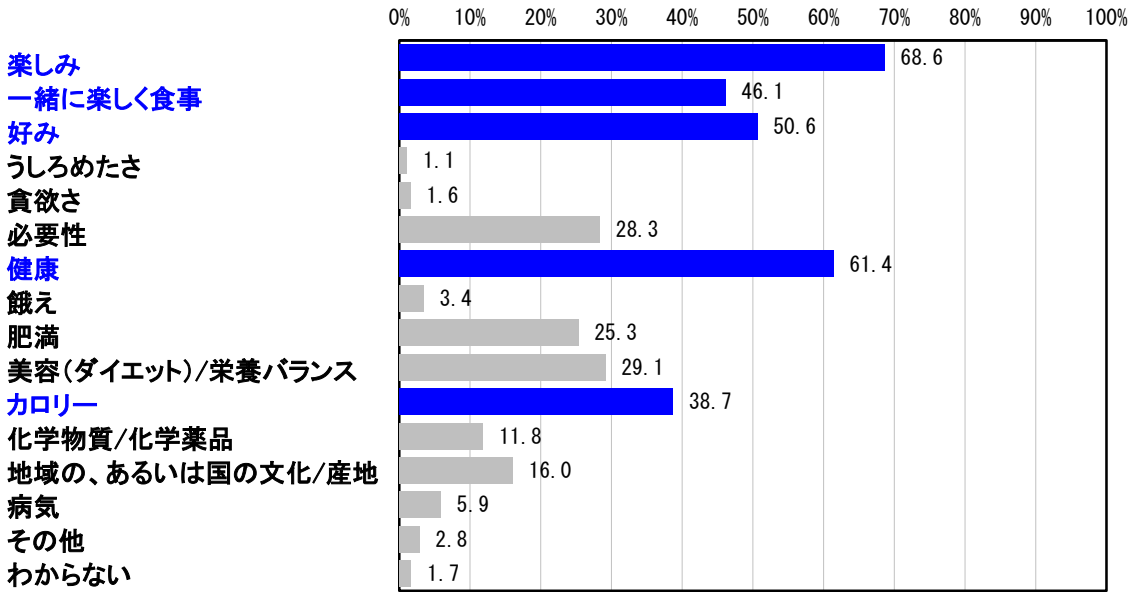
項目	1位	2位	3位	4位	5位
食品表示の見方	245(18.8)	137(10.5)	122(9.4)	113(8.7)	94(7.2)
食品の鮮度の見分け方	243(18.7)	217(16.7)	141(10.8)	87(6.7)	70(5.4)
消費期限と賞味期限	148(11.4)	165(12.7)	146(11.2)	93(7.2)	75(5.8)
食品添加物	141(10.8)	138(10.6)	143(11.0)	147(11.3)	92(7.1)
地産地消	101(7.8)	70(5.4)	82(6.3)	72(5.5)	81(6.2)
食中毒防止	99(7.6)	110(8.5)	90(6.9)	112(8.6)	86(6.6)
残留農薬	53(4.1)	89(6.8)	79(6.1)	88(6.8)	65(5.0)
安心と安全の違い	53(4.1)	32(2.5)	63(4.8)	65(5.0)	77(5.9)
食物アレルギー	44(3.4)	64(4.9)	50(3.8)	66(5.1)	69(5.3)
リスクの考え方	36(2.8)	36(2.8)	37(2.8)	38(2.9)	60(4.6)
天然毒・自然毒	28(2.2)	41(3.2)	58(4.5)	37(2.8)	40(3.1)
化学物質の量と作用の関係	26(2.0)	35(2.7)	49(3.8)	48(3.7)	39(3.0)
消費者の役割と責務	26(2.0)	16(1.2)	19(1.5)	25(1.9)	58(4.5)
輸入食品	22(1.7)	45(3.5)	51(3.9)	25(1.9)	58(4.5)
遺伝子組換え食品	15(1.2)	18(1.4)	62(4.8)	74(5.7)	81(6.2)
科学的根拠の重要性	9(0.7)	16(1.2)	19(1.5)	24(1.8)	24(1.8)
加工食品・調理済み食品	6(0.5)	18(1.4)	25(1.9)	38(2.9)	41(3.2)
情報リテラシー	4(0.3)	9(0.7)	7(0.5)	10(0.8)	20(1.5)
メディアの功罪	1(0.1)	5(0.4)	11(0.8)	17(1.3)	34(2.6)
健康食品	0(0.0)	0(0.0)	4(0.3)	6(0.5)	11(0.8)

*全回答者1,300人に対する割合

文献)

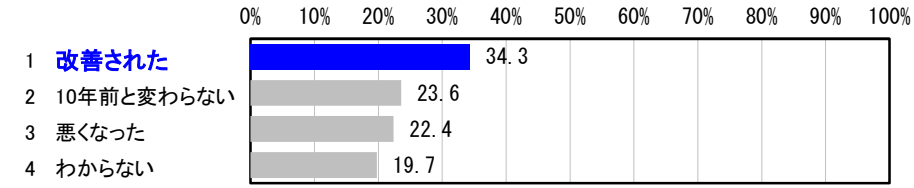
Haruka Horikawa, Rie Akamatsu, Itsuko Horiguchi, Eiji Marui Parental views of food-safety education in Japanese primary school Health Education Journal 2013 vol. 72 no. 4 460-468

問. 食事や食品について考えるとき、頭に浮かぶことは何ですか。(複数回答可)

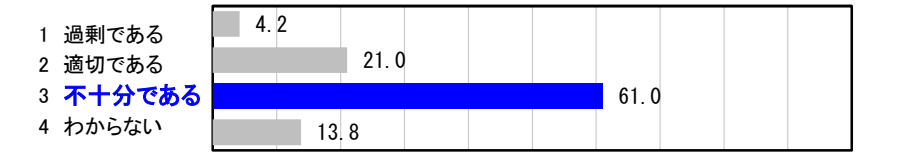


調査期間 2011年12月
調査対象 消費者パネル1000名
(20歳台から60歳台)

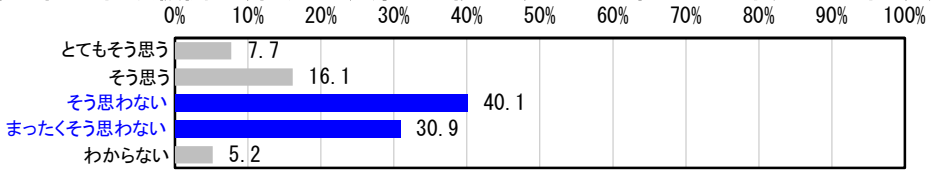
問. 10年前に比べ「食の安全」は全体的にみてどのようなになったと思いますか。



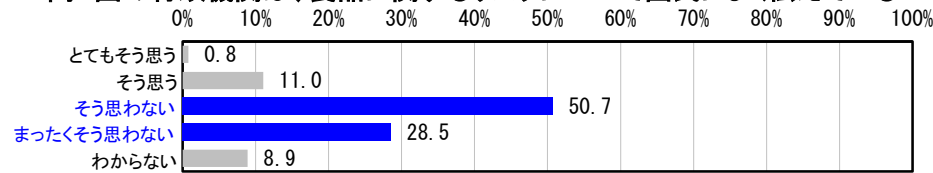
問. 食品の安全に関する国の行政機関の対処について、あなたは日ごろどう感じていますか。



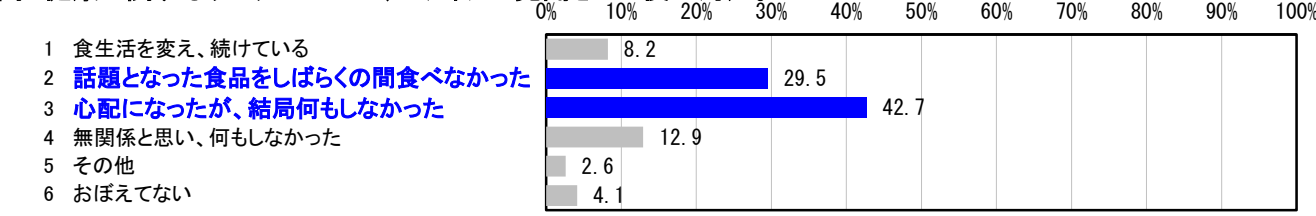
問. 国の行政機関は、国民の健康に危険があることがわかった時すばやく行動する



問. 国の行政機関は、食品に関するリスクについて国民によく伝えている



問. 健康に関するリスクについて、メディアで見聞きした後の対処。



コミュニケーションには お金がかかる

(経験から)

コミュニケーションのデザイン 対象 内容 地域

大阪



長崎



北海道



めぐる、感染症そして研究の今

-聞いてみよう、話してみよう-

私たちは、感染症の診断や研究をすすめるうえで必要不可欠な高度安全実験施設の在り方に関する調査・研究を平成18年度からすすめてきました。
研究がすすむにつれ、日本における感染症及びその研究の現状について、広く周知する必要性を強く認識しました。
本年度は、研究の最終年度にあたり、多くの方々にこれまでの成果についてご報告するとともに、日本を代表する感染症研究者との交流から現状を知っていただき、意見交換をしていただく機会を設けました。
8月の札幌会場を皮切りに12月まで全国4カ所にて開催いたします。
みなさまのご参加を心よりお待ちしております。

スケジュール/会場

札幌：2008年9月24日(日) 11:00~16:30
会場：紀伊國屋書店札幌本店1階 インナーガーデン
大阪：2008年11月16日(日) 13:00~16:00
会場：大阪大学 中之島センター
佐治敬三メモリアルホール
東京：2008年11月22日(土)~24日(祝)
10:30~17:00
会場：日本科学未来館 7階 会議室2
長崎：2008年12月21日(日) 13:00~17:00
会場：長崎大学医学部 応用会館

※ 全会場参加費無料、事前申込み不要

お問い合わせ先：理化学研究所 感染症研究センター 〒113-8421 東京都文京区本郷 2-1-1
TEL: 03-5802-1049 FAX: 03-3814-0305 URL: <http://kansensho-info.com/>
主催：理化学研究所 感染症研究センター 国立感染症研究所 北海道大学 人間共通感染症リサーチセンター
大阪大学 微生物学研究所 長崎大学 微生物学研究所 ※ 文部科学省 科学技術振興機構 により実施されています。





Report of the International Conference on Risk Communication Strategies for BSL-4 laboratories, Tokyo, October 3-5, 2007.

Biosecur Bioterror 2009

Jun;7(2):227-33.

[Dickmann P](#), [Keith K](#), [Comer C](#), [Abraham G](#), [Gopal R](#), [Marui E](#).

独・英・米・加・豪州・日

Abstract

Working with highly pathogenic agents such as Ebola or Marburg virus in the context of infection control or biodefense research requires high-biocontainment laboratories of the Biosafety Level 4 (BSL-4) to protect researchers and laboratory staff from infection and to prevent the unintentional release of harmful agents. The public perception of research on highly pathogenic agents and the operation of high-containment facilities is often ambivalent: while the output of the biomedical research is highly valued, the existence of a BSL-4 lab is often viewed with concern. Biomedical research perspectives and public perceptions often differ and can lead to tensions that could have negative effects on research, society, and politics. Therefore, risk communication plays a crucial role in siting, building, and operating a high-containment facility. The Japanese government invited risk communication experts and scientists from Canada, the U.S., Europe, and Australia to discuss their risk communication strategies for BSL-4 labs. This article describes the international perspective on risk communication and gives recommendations for successful strategies.